2024.10.1
第185号

発行
福島県市町村教育委員会連絡協議会
北会津支会
耶麻支会
両沼支会

編集
福島県教育庁会津教育事務所

編集協力
小・中学校長会

統合小・中学校に期待すること
「誰もが行きたくなる学校づくり」

猪苗代町教育委員会
教育長　宇南山　忠明

令和四年四月に、町内三校の中学校が統合し、新「猪苗代中学校」が開校した。今年四月には、六校の小学校が統合し、「猪苗代小学校」と「猪苗代第二小学校」の二校が開校した。統合した小・中学校に期待することは、誰もが行きたくなる学校づくりである。それには、児童生徒、教師、保護者、地域と行政が協力し合って、それぞれの役割を担うことが肝要だと考える。

児童生徒は、①自分の性格・個性を大事にすること。②友達のよい所を見つけ、認めること。③どんな事にも積極的に参加し挑戦すること。④保護者や地域の方に感謝すること。⑤一人で悩まず友達や先生に相談すること。

教師は、①指導者として、一人一人の児童生徒が「わかった、できた」と実感することができる授業をすること。②毎日の学校生活の中で、児童生徒の個性や性格を把握し、一人一人のよい所を見つけ認めて伸ばすこと。③児童生徒・保護者・地域との信頼関係を築くこと。

保護者は、①子どもの考えや意見を、しっかり聞くこと。②自分の子と他の子を比較するのではなく、自分の子のよい所を見つけ伸ばすこと。③ダメなことはダメと叱り、よいことは褒めること。④子育てで心配なことや、悩みがあったら誰かに相談すること。

地域は、①子どもが悪いことをしたら、その場でしっかり指導すること。②子どもたちが地域のために、よい行動をしたことを見たり聞いたりしたら学校に知らせること。③地域の行事やボランティアに子どもたちを誘うこと。

行政は、①学校の教育環境の整備と予算確保を行うこと。②教職員の人材確保と教職員の資質・能力向上のための支援を行うこと。

少子高齢化が益々進む中、本町の子どもたちが、安全・安心な学校生活を送り、誰もが行きたくなる学校をつくるため、学校・保護者・地域・行政が、協力・連携して取り組んでいきたい。

令和六年度前期を振り返って

前期の所長（管理）訪問は、六十七校を訪問させていただきました。（後期は十九校を予定）

授業参観では、目を輝かせながら、積極的に友達と関わり、意欲的に学ぶ子どもたちの姿をたくさん目にすることができました。一方で、教師が一方的に話す授業もまだ見られます。これまで積み上げてきたスタイルを変えることは容易ではありませんが、教師が変わらなければ学びの変革はありません。教師が「話す」授業から、教師が「みる」「きく」「つなぐ」授業へと変革が図られるよう、この点を重視した取組をお願いいたします。

管理面では、今年度の管理重点項目である「①働き方改革の推進」「②学校全体の教育力向上」「③不祥事の根絶」について、各学校での工夫した取組を伺うことができました。

なお、「不祥事の根絶」については、「服務倫理対策会議」、「学校事故防止対策研究協議会」を始め、様々な会議を通して、研修を深めていただきました。研修内容を自校の実践に生かし、教職員一人一人が自分事として捉え、不祥事を絶対に起こさないという強い決意をもつことができるよう、更なる取組の充実をお願いいたします。

会津教育事務所では、域内の課題解決のために、参考となる情報の提供や研修会の充実などに努めながら、引き続き各学校を支援してまいります。

令和６年度　会津教育事務所　指導の重点【後期】

第７次福島県総合教育計画

令和６年度学びの変革推進プラン

会津の強み【令和６年度の学校訪問や各校の学力向上の取組、各種研修会協議から】

1　児童生徒の「対話」を意識しながら授業が展開されるなど、授業改善の意識が広がりつつある。教職員が一丸となって授業改善に取り組んでいる学校が増えている。
2　児童生徒のよさを見取り、学級全体に広げていくような教師のコーディネートが見られる。生徒指導の機能を生かしながら、児童生徒が互いに認め合えるような学級集団づくりに取り組んでいる学校が増えている。
3　ユニバーサルデザインの視点を大切にした授業づくりが行われている。児童生徒が「分かる・できる」授業を目指した授業実践が増えている。

会津の課題【令和６年度全国学力・学習状況調査結果、学校訪問等から】

1　全国平均正答率と比較すると、国語（小）及び国語（中）は全国平均をやや下回り、算数（小）及び数学（中）は下回っている。
2　平日や休日において、ゲームやスマートフォン等を使用する時間が多くなるにつれて、各教科の正答率が低下する傾向が見られる。
3　育成すべき資質・能力を明確にすることや、指導と評価の一体化を目指した授業づくりについて、意識を高めていく必要がある。
4　ＩＣＴ機器を活用しながら自分の考えや意見を分かりやすく伝えるなど、「対話的・協働的な学び」のさらなる促進が求められる。
5　不登校児童生徒が年々増加し、1,000人あたりの出現率が全国や県平均を上回る傾向が見られる。

学びをつなぐ、育ちをつなぐ教育

確かな学力

1　主体的・対話的で深い学びの実現
○　**「授業スタンダード」**に基づく授業づくり
①　見方・考え方を働かせる問いの設定
②　ねらいを明確にした話し合い場面の設定
③　まとめ・振り返りの時間の十分な確保
④　一人一人の児童生徒の学び（変容）の見取り
○　**「指導の重点（小・中学校教育版）」**の活用
・各教科等の授業の設計・実施・評価の工夫

2　学習の連続性を持たせる基盤づくり
○　**「家庭学習スタンダード」**に基づく自己マネジメント力の育成
①　授業の学習内容の定着を図る家庭学習
②　家庭学習（復習、予習）を効果的に活用した授業の実施

3　学力向上対策の組織的な推進による授業改善
○　全国学力・学習状況調査、ふくしま学力調査の**結果分析と活用**（授業改善グランドデザイン参照）
・客観的データに基づく実効性のある改善策の実施
○　教師が「話す」授業から、教師が「みる」「きく」「つなぐ」授業への転換（授業改善グランドデザイン参照）
○　**「ふくしま活用力育成シート」**の活用による授業の質的改善
○　**ＩＣＴ機器**を効果的に活用した学びの充実

4　カリキュラム・マネジメントの充実
○　育成を目指す資質・能力の明確化と教育課程の意義の共有
・教科横断的な視点による教育計画の作成と実施

居場所づくりと絆づくり

1　不登校の未然防止と早期対応
○　**「ふくしまサポートガイド」**の活用
①　教師による「居場所づくり」と児童生徒による「絆づくり」の推進（温かみのある学校風土）
②　「個別の援助計画」の作成と校内・校種間での共有
③　ＳＣやＳＳＷ、保護者を加えたチームによる組織的な援助
④　「特別な教室」設置やＩＣＴ活用による学習機会の確保
⑤　「子どものＳＯＳをより早く気づくために」（パンフレット・ホームページ版の活用）
※会津教育事務所作成
⑥　誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策（ＣＯＣＯＬＯプラン）に基づいた「チーム学校」による支援

2　いじめ見逃しゼロ
①　積極的な認知と組織的な早期対応
②　定期的アンケート調査等による状況把握と具体的対応

3　情報モラル教育の充実
○　**「ふくしま情報モラル診断」**を活用したＳＮＳ利活用の適正な考え方と態度の育成
①　アンケートによる児童生徒の実態把握
②　回答の分析による問題行動や課題の発見

4　心に響く道徳教育
①　学校、家庭、地域が一体となった道徳教育の推進
②　児童生徒が自己を見つめる時間を重視した授業づくり

共に学び、共に生きる教育

1　校内支援体制の充実
○　**「コーディネートハンドブック【2020 年版】」**の活用
①　特別支援教育コーディネーターを核としたケース会議や校内研修の充実
②　児童生徒、保護者との合意形成に基づく「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」の作成と活用、引継ぎ
③　上記計画を活用した交流及び共同学習の充実
④　教育的ニーズの整理の仕方（ハンドブック追補版参照）

2　ユニバーサルデザインの視点による授業づくり
・教室の環境整備やつまずきを想定した手立ての工夫

健やかな体

1　体力向上と健康推進
○　**「自分手帳」**の活用による健康マネジメント能力の育成
①　体力向上推進計画の見直しと評価・改善
②　適切な運動量が確保された息も心も弾む授業の工夫

2　教育活動全体による食育の推進
①　肥満防止などの望ましい食習慣の育成
②　栄養教諭等の専門家派遣事業の活用

育ちをつなぐ学び

1　キャリア教育の推進
○　**「キャリア・パスポート」**の活用
①　成長の振り返りや将来の生き方を考える学びの充実
②　学年・校種間・高等学校への引継ぎと実践的な活用

2　幼児教育の充実
①　幼児期における資質・能力の育成を図る指導計画の作成と実施
②　幼児教育段階からの非認知能力の育成と小学校以降につなぐ取組の実施
③　幼保小連携、家庭や地域との連携の充実

「豊かな人間性を培う親子のコミュニケーション」

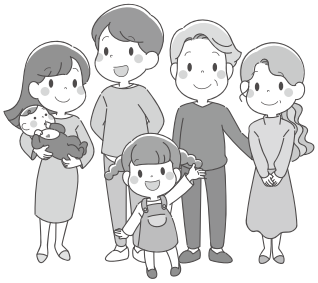
～第１回地域家庭教育推進会津ブロック会議より～

各地区のＰＴＡ代表者、家庭教育を支援する団体の方々、学校関係者等で組織する「第１回地域家庭教育推進会津ブロック会議」が行われました。昨年度作成された、不登校支援のための「家庭教育支援リーフレット」の有効活用と、今年度の新たなテーマである「豊かな人間性を培う親子のコミュニケーション」について協議いたしました。

「家庭教育支援リーフレット」については、年々増加する不登校の子どもと家庭を支援するために作成したものです。今年度も引き続き、不登校等で困っている保護者へ配付することはもちろん、学校だよりやホームページ、さらには、保護者会や各種研修会等で有効に活用していただくようお願いいたします。このリーフレットには、親子のよりよい関係を築くためのポイントだけでなく、お子さんが登校をしぶったり、不登校になったりした際の相談先についても掲載しておりますので、積極的にご活用ください。なお、このリーフレットは、当事務所のホームページからもダウンロードをすることができます。

また、今年度は、標題のとおり、新しいテーマのもと、協議を進めてまいります。社会環境が大きく変化する中、子どもたちとどう関わっていくことが大切かを話し合っていきますので、関連するご意見、ご感想がありましたら、当事務所までお願いいたします。

〈家庭教育支援リーフレット〉



会津教育事務所
ホームページ

我がまちからの情報発信

会津坂下町教育委員会

会津坂下町埋蔵文化財センターの活動

会津坂下町には、福島県最大の前方後円墳である史跡亀ケ森古墳をはじめ、史跡や遺跡が多数存在しています。この背景には、本地域が越後と会津を結ぶ交通の要衝に位置していたことがあると考えられます。

本町では、昭和から平成にかけて県営ほ場整備事業をはじめとする大規模な開発事業が行われ、これに伴う発掘調査が実施されたことで膨大な遺物が出土しました。これらの遺物は、一部展示されたものの町内に分散して保管されていました。

平成２５年、少子化に伴う学校の統廃合で、廃校となった学校の跡地利用が検討され、旧広瀬小学校は史跡亀ケ森・鎮守森古墳にも近いことから、埋蔵文化財センターとして活用することが町に答申されました。

これを受けて、教育委員会は、文化庁補助事業の「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」により、平成２９年度に収蔵庫、図書室設備工事、平成３０年度に展示室設備工事を実施し、令和元年５月に会津坂下町埋蔵文化財センターとして新たにオープンいたしました。

本センターでは、これまで分散されていた出土品を集約して再整理を行い、デジタル化してデータベースとして管理しています。このことから学生や研究者への閲覧、博物館などへの貸出し業務が容易となりました。また、展示室では旧石器時代から近代に至る常設展や、毎年テーマを変えた企画展を実施し、その講演会も実施しています。町内の小学校からの見学も受け入れ、町内の出土資料をもとに郷土の歴史や文化について説明しています。

令和３年には、「会津坂下町埋蔵文化財センター友の会」を発足させ、勉強会や見学会を定期的に実施して、ボランティアガイドの育成にも努めております。さらに広瀬地区コミュニティセンターと共同で、小学生向けの体験学習も行っています。

〈児童の見学の様子〉

各学校の特色ある取組紹介

地域とともに

会津若松市立湊学園

本校は今年度、義務教育学校として新たな歩みを始めました。湊学園の開校に当たり、教育課程の編成を進める上で大切にしたことの一つに、「地域との連携・協働」が挙げられます。湊町の自然・文化・産業等を題材にした体験的な活動及び探究的な活動を通して、郷土を愛する心を育むとともに、自身の生き方を見つめ、キャリア発達を促すことをねらった独自の教科として、「湊ふるさと・キャリア科」を位置づけました。

具体的な取組として、３年生による地域の特産物のアスパラガス収穫体験、４年生による学校林の手入れ作業や湊町を流れる原川の水質調査などを行いました。これらは、地域学校協働本部を通じ、地域ボランティアの方々の協力を得て実施しています。また、地域との関わりを大切にし、地域に貢献するという目的で、全校生縦割り班による地域クリーン活動も行いました。

今後、さらにふるさと湊町への理解を深め、地域の方との交流を図り、湊町に生まれ育ったことを誇りに思う子どもたちの育成に取り組んでいきたいと考えます。

〈学校林の間伐作業にて〉

本校の「農業科」

喜多方市立第三小学校

本校は、喜多方市の東部に位置し、学区に多くの緑豊かな田畑が広がります。

本市の小学校では、平成１９年から教科として「農業科」に取り組んでいます。

本校では、農業科を進めるにあたり、７名の農業科支援員さんのご協力のもと、児童に栽培方法を指導していただいています。児童は野菜と米づくりを体験します。学校全体で育てる作物と各学年で計画して育てる作物を、児童が話合いで決めて栽培しています。

○　学校全体で育てる作物…サトイモ、大根、白菜、ニンジン、長ネギ

○　各学年で育てる作物
　１年…サツマイモ
　２年…サツマイモ、トウモロコシなど各種夏野菜
　３年…枝豆（大豆）　４年…落花生
　５年…米　　６年…ジャガイモ

秋には田畑でとれた米や野菜で収穫祭を行います。児童が米を炊き、おにぎりを作ります。野菜は、簡易かまどを用いて芋汁にします。サツマイモは焼き芋にします。最後には、農業科支援員さんを招待してみんなでいただきます。そして、支援員さんに感謝の気持ちを伝えます。収穫祭のときだけでなく、各学年の計画で育てた作物で、スイートポテト、こづゆ等を作り、地域の方々と交流しながら、食育もかねて学習を深めています。

本市ならではの農業科の取組を、豊かな自然と地域の方々とともに、本校の特色ある教育の一つとしてさらに深化させていきたいと思います。

〈田植えの様子〉

小規模校の強み

北塩原村立第一中学校

本校は、地域性を活かした教育活動や、小規模校の強みを活かした教育活動に継続して取り組んでいます。

地域性を活かした教育活動として、稲作体験学習や自然・歴史学習、異世代交流学習が挙げられます。特に、稲作体験学習は、地域の農家の方にお世話になり、１０年以上も継続している活動です。天候や生育状況などにより延期や時間変更があるのは当たり前で、自然に合わせて活動することで、「自然と共生すること」を実体験として学んでいます。

小規模校の強みを活かした教育活動としては、学年縦割りでの活動や、ＩＣＴを活用した教育活動が挙げられます。様々な活動を学年の枠を越えた小集団で行うことにより、上級生にはリーダーシップが養われます。小集団であるため、１、２年生にとっても、発言しやすく、一人一役が必ず割り振られることで、充足感を感じることのできる活動ができるよさがあります。

また、少人数であるがゆえに、全校生が同時にＩＣＴ機器を使用しても、通信環境の問題が生じません。これまで「ふくしま『未来の教室』授業充実事業」に関わる機会をいただき、各教科におけるＩＣＴの利活用に向けたＧＩＧＡ端末や、各種ソフトの効果的な活用方法について研究推進することができました。

本校の教育活動の一端を紹介しましたが、今後も、地域性や小規模校の強みを活かした教育活動を推進し、生徒の健やかな成長を実現していきたいと思います。

〈稲作体験学習の様子〉

〈ＩＣＴを活用した授業の様子〉